

〈1〉 出産・加齢・エストロゲン低下の女性腹圧性尿失禁に及ぼす影響に関する研究

The study of delivery, aging, and estrogen deficiency that affect woman stress urinary incontinence.

北海道大学病院 泌尿器科 橘田 岳也

女性、特に高齢女性における腹圧性尿失禁は 200 万人を超える罹患者がいると報告される。腹圧性尿失禁は QOL や尊厳の低下につながるため、高齢女性が健康で幸福な生活を送るために適切な治療を受けることは重要である。しかし、そのメカニズムは十分に解明されていない。腹圧性尿失禁の治療法は、薬剤や骨盤底筋体操をはじめとする非観血的治療と手術療法に分けられるが、現在使用される薬剤はごく少数であり、その有効性は十分とは言えない。また、手術療法については、高齢女性が罹患する疾患であるため合併症が多く存在する点、非可逆的な治療である点からその適応については慎重とならざるを得ない。我々は以前より腹圧性尿失禁のメカニズムを解明するためにラットモデルを用いて神経学的、薬理学的作用機序についての検討を行ってきた。今回の研究目的は加齢・エストロゲン低下・出産等の腹圧性尿失禁のリスクファクターといわれる要素がどのように尿道機能に影響を与えるかを明確にすることである。本分野に対する検討は過去にも散見するが、すべて静的な圧測定のみのものであり、我々のような尿禁制に対するリアルタイムモニタリングを行った報告はみられない。今回の目的のために病態モデルである加齢、卵巣摘除、膣壁拡張モデルを用いて、どのように尿道機能に影響を与えるか確認する。さらに、今後臨床で用いられる可能性が高い SNRI をはじめとする新規腹圧性尿失禁薬の作用についても検討する予定である。本実験は未だ不明な点が多い腹圧性尿失禁の複雑な要素を解明し、その成因を解明しさらに適切な治療方針を提示することにある。